

## 宮寺「茶場後碑」について

整理番号	題額	題額揮毫	碑記撰文	碑記揮毫
入間〇四	茶場後碑	萩原鞏	中村正直	萩原鞏

鐫刻	撰文年	住所	場所	備考
広瀬群鶴	一八七六・明治九	宮寺南中野	出雲祝神社	

### 一. はじめに

明治維新後、海外との貿易が本格化すると、初期の主な輸産物は、絹糸と茶であった。そこで、銘茶を産すると誇る狭山の地で、それを顕彰する石碑が三基建てられた（一基は未完）。本石碑はその最初のもので、「重開茶場碑」と同じく、宮寺郷の出雲祝神社に建てられたもの。

なお、「狭山茶業史」によれば、区長であった繁田武平（おそらく光義）が、本碑を建設中である旨を県令白根多助に届けた文書がある（県文書館蔵）。また、中村に撰文を直接依頼した熊谷の人について、本碑文では「某」とするが、「敬宇文集」では「村野彌七」と姓名を記している。

○写真1 石碑正面



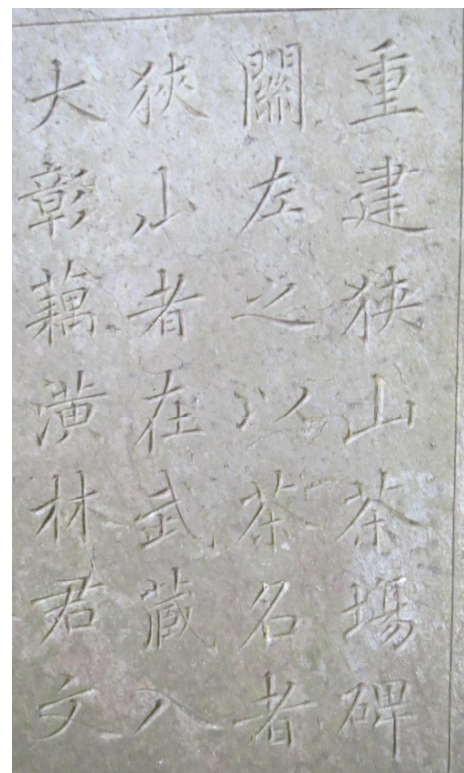
茶 場 後 碑

■ 翻刻  
● 題字 (隸書體)

二. 翻刻並びに訳注



○写真2 題額



○写真3 「碑記」部分

重建狹山茶場碑記

江戶 中邨正直撰

關左之以茶名者曰狹山焉與宇治東西相頡頏或曰其茶香氣出于宇治之上狹山者在武藏入間郡其始不過一荒僻之地耳自種茶以來逐歲增殖其名既大彰藕潢林君文可徵也蓋自海關禁弛互市盛行我國茶葉爲出口品之冠每年輸將于海外者千有萬斤如宇治之製昔獨擅美于邦內者今則著稱于歐亞而狹山之茶後起爭雄至于洋賈之旅于東者非其記號不顧可謂盛矣抑利之所在民之所赴也昔者關左地曠人希彌望黃茆白葦爲豺狼狐兔之町窟宅者盡已墾闢爲沃壤而其所出之茶則莫不題簽曰狹山狹山之名于是乎廣矣原夫舊碑建于天保三年是時未有海外互市之事然而人民勤勉倡導以致產物熾盛若豫立今日輪出品之基礎者其功豈淺尠哉前事之不忘後事之師也夫既知狹山茶場之盛實由于其父祖勤勉之力則當知後來之福利又在其子孫之繼續不怠以益恢弘前緒焉可不勗乎且予聞之人民之克勤職業務富一家者其利于全國大于一家之利焉余既嘉狹山人民之勤勉于昔日以致昌盛于

今則又更望其堅忍耐久不屈撓于少利害能光前而啓後益有以崇殖邦國之福利也能谷縣人某來代言其鄉人之意求余文勒諸石以追配舊碑余深喜此舉故應其請而系之以詞曰茶產東方味甘且香狹山之鄉此焉開場土性最良菟道頡頏聲名丕彰壓倒建陽洋客竟嘗日購萬箱沾彼胃腸富我橐囊昔人謀臧邦國之慶繼嗣克昌福利旡疆

明治九年丙子五月

秋巖菽原書并題額

廣瀨羣鶴鐫

●異体字等

- 場 場。
- 邨 村。
- 直 直。
- 或 或。
- 歲 歲。
- 盖 蓋。
- 國 國。
- 號 號。
- 所 所。
- 所 所。
- 致 致。
- 哉 哉。
- 職 職。
- 此 此。
- 土 土。
- 竟 競。
- 嘗 嘗。

■ 訳注

● 本文（いわゆる旧字体とし、一行毎に改行した）

\* 本碑文は、「敬字文集」に収録されているがかなり文字の異同がある。「\*」で示した。

重建狹山茶場碑記

江戸 中村正直撰

關左之以茶名者、曰狹山焉。與宇治東西相頡頏。

或曰、其茶香氣、出<sup>\*1</sup>于宇治之上。

狹山者、在武藏入間郡。

其始不過一荒僻之地耳。

自種茶以來<sup>\*2</sup>、逐歲增殖、其名既大彰<sup>\*3</sup>。藕濱林君文可徵也。

蓋自海關禁弛、互市盛行。我國茶葉爲出口品之冠。

每年<sup>\*4</sup>輸將于海外者、千有萬斤<sup>\*5</sup>。

如宇治之製、昔獨擅美于邦內者、今則著稱于歐亞。

而<sup>\*</sup>。狹山之茶、後起爭雄、至于洋賈之旅于東者、非其記號<sup>\*7</sup>不顧。

可謂盛矣。

抑利之所在、民之所赴<sup>\*8</sup>也。

昔者關左、地曠人希、彌望黃茆<sup>\*9</sup>。白葦、爲豺狼狐兔之所窟宅者<sup>\*10</sup>。

盡已墾闢、爲沃壤<sup>\*11</sup>。

而<sup>\*12</sup>其所出之茶、則<sup>\*12</sup>莫不題簽曰狹山。

狹山之名、于是乎廣矣。

原夫舊碑、建于天保三年。

是時未有海外互市之事。

然而人民勤勉倡導、以致產物熾盛。

若豫立今日輸出品之基礎者、其功豈淺眇哉。

前事之不忘、後事之師也。

夫既知狹山茶場之盛、實由于其父祖勤勉之力。

則<sup>\*13</sup>當知後來之福利<sup>\*14</sup>、又在其子孫之<sup>\*15</sup>繼續不怠、以益恢弘前緒焉。

可不勗乎<sup>\*16</sup>。

且予聞之、

人民之克勤職業、務富一家者。

其利于全國、大<sup>\*17</sup>于一家之利焉<sup>\*18</sup>。

余既嘉狹山人民之勤勉于昔日、以致昌盛于今。

則又更望、其堅忍耐久、不屈撓于少利害、能光前而啓後、益有以崇殖邦國之福利也。

熊谷縣人某<sup>\*19</sup>、來代言其鄉人之意<sup>\*20</sup>、求余文、勒諸石<sup>\*21</sup>、以追配舊碑。

余深喜此舉。

故應其請、而系之以詞。

曰、

茶產東方<sup>\*22</sup>、味甘且香。

狹山之鄉、此焉開場<sup>\*23</sup>。

土性最良、菟道頡頏<sup>\*24</sup>。  
聲名丕彰、壓倒建陽<sup>\*25</sup>。  
洋客競嘗、日購萬箱。  
沾彼胃腸、富我橐囊。  
昔人謀臧、邦國之慶。  
繼嗣克昌、福利牙彊。

明治九年丙子五月、  
秋巖萩原翬書并題額。  
廣瀨群鶴鐫。

◎校勘（「敬字文集」）

- \* 1 「文集」作「超出」。
- \* 2 「文集」作「然自始種茶」。
- \* 3 「文集」作「其名漸既彰著」。
- \* 4 「文集」作「歲」。
- \* 5 「文集」作「蓋千有萬金矣」。
- \* 6 「文集」作「而如」。
- \* 7 「文集」作「名號」。
- \* 8 「文集」作「趨」。
- \* 9 「文集」作「茅」。
- \* 10 「文集」作「如那須野原者、所在皆然。而今則武藏上下毛以及相模、嘗爲豺狼狐兔之所窟宅者」。
- \* 11 「文集」作「沃壤膏土」。
- \* 12 「文集」無。
- \* 13 「文集」作「則又」。
- \* 14 「文集」作「後來雲仍之福」。
- \* 15 「文集」作「今日人民之」。
- \* 16 「文集」無。
- \* 17 「文集」作「更大」。
- \* 18 「文集」無。
- \* 19 「文集」作「村野彌七者」。
- \* 20 「文集」作「承其鄉人之意、來」。
- \* 21 「文集」作「將欲勒諸石」。
- \* 22 「文集」作「武陽」。
- \* 23 「文集」作「狹山關場、規模恢張」。
- \* 24 「文集」作「製法精良、樹幟一方」。
- \* 25 「文集」作「菟道頡頏」。

●訓詁

重ねて狹山茶場碑を建つるの記

江戸、中村正直撰す。

關左の茶を以て名ある者は、曰く、狹山と。宇治と東西相ひ頡頏す。

或ひは曰く、其の茶の香氣は、宇治の上に出づ、と。

狹山は、武蔵の入間郡に在り。

其の始めは一荒僻の地に過ぎざるのみ。

茶を種えしより以來、歳を逐ひて増殖し、其の名既に大いに彰ること、藕ぐくくわう 潢林君の文に徴すべし。

蓋し海關の禁弛ゆるみてより、互市盛んに行はる。我が國の茶葉は出口品の冠たり。

毎年、海外に輸將する者は千有萬斤なり。

宇治の製の如き、昔は獨り美を邦内に擅ほしいままにするも、今は則ち歐亞に著稱せらる。

而して狹山の茶、後に起りて雄を争ひ、洋賈の東に旅する者、其の記號に非ざれば顧みざるに至る。

盛と謂ふべし。

抑々利の在る所は、民の赴く所なり。

昔者關左は、地曠ひろく人希まれにして、彌望びぼう黄茆白葦にして、豺狼狐兔の窟宅する所となる者なり。

盡く已に墾闢せられて、沃壤となる。

而して其の出だす所の茶は、則ち題簽して狹山と曰はざるは莫し。

狹山の名、是においてか廣まる。

夫の舊碑を原ぬるに、天保三年に建てられしものなり。

是の時、未だ海外互市の事有らず。

然りして人民勤勉倡導して以て産物の熾盛なるを致す。

豫あらがじめ今日の輸出品の基礎を立つる者の若し。其の功豈に淺渺ならんや。

前事の忘れざるは、後事の師なり。

夫れ既に狹山茶場の盛んなるは、實に其の父祖の勤勉の力に由るを知るなり。

則ち當に知るべし、後來の福利は、又た其の子孫の繼續して怠たらず、以て益々前緒を恢

弘するに在るを。

勗つとめざるべけんや。

且つ予之を聞く、

人民の克く職業に勤むるは、務めは一家を富まさんとする者なり。

其の全國を利するは、一家の利よりも大なり、と。

余、既に狹山人民の、昔日に勤勉にして、以て昌盛を今に致すを嘉よみす。

則ち又た更に望む、其の堅忍耐久して、少利害に屈くつとう撓せず、能く前を光てらして後を啓き、

益々以て邦國の福利を崇殖すること有らんことを。

熊谷縣人の某、來りて其の郷人の意を代言して、余に文を求む。諸これを石に勒して、以て

舊碑に追配せんとす。

余深く此の舉を喜ぶ。

故に其の請こひに應じ、而して之に系かくるに詞を以てす。

曰く、

茶は東方に産し、味は甘く且つ香かんばし。

狭山の郷、此れ焉に場を開く。  
土性最も良く、菟道に頡頏せり。  
聲名丕おほいに彰れて、建陽を壓倒す。  
洋客競ひて嘗め、日に萬箱を購ふ。  
彼の胃腸を沾うるほし、我が橐囊を富ます。  
昔人の謀の臧よきは、邦國の慶さいはひなり。  
繼嗣よ克く昌んにせば、福利かぎ彊りなからん。

明治九年丙子五月

秋巖萩原翬、書し、並びに題額す。

廣瀬群鶴、鐫す。

## ●人物

○中村正直 天保三（一八三二）年から明治二十四（一八九一）年。字は敬輔、号は敬宇。江戸幕府同心の子として生まれる。嘉永元（一八四八）年に昌平坂学問所寄宿寮に入り、佐藤一斎に儒学を、箕作圭吾に英語を習う。文久二（一八六二）年に幕府御用儒者となり、慶応二（一八六六）年に留学生を率いてヨーロッパへ渡る。同四（一八六八）年に帰国し、大蔵省翻訳局や東京大学に任官した。同六（一八七三）年には、福沢諭吉、森有札らと明六社を設立。啓蒙思想家として活躍した。訳書に『西国立志編』などがある。中村の漢詩文集に、松村操纂輯編『敬宇先生詩文偶抄』（思誠堂、一八八一年）、『敬宇文集』（吉川弘文館、一九〇三）がある。本碑文撰文は四十五歳のとき。

○藕あき潢 林あき樵の号。寛政十二（一八〇〇）年から安政六（一八五九）年。林家八代述齋の第六子。書物奉行、西丸留守居役などを歴任、嘉永六（一八五三）年に本家を相続し、大学頭を名乗り、復齋と号した。全権の一人として、同七（一八五四）年の日米和親条約に調印。江戸時代の対外関係資料をまとめた「通航一覽」を編纂した。「重關茶場碑」碑文を撰文したのは、三十三歳、幕府官僚時代である。

○秋巖萩原翬 享和三（一八〇三）年から明治十（一八七七）年。諱が翬、秋巖は号。字は文侯、通称は祐助、のち自然と改める。幕末三筆の一人巻菱湖門下で、中沢雪城・大竹蔣塘・生方鼎齋とともに四天王と呼ばれた。本碑文を書いたのは七十四歳、死の前年。

○廣瀬群鶴 碑銘字彫師の名称だが、むしろ彼を頭領とする石工工房の名称とするのが実態にあうだろう。江戸後期から昭和まで九代続いた。東京を中心に数多くの作品を残しているが、幕末期には、「小笠原新はりの記」や「八丈島西山卜神記碑」など、政治的・歴史的に重要な碑文の雋刻も手がけている。埼玉県にも本碑以外に少なくない。

## ●注

○茶場 茶業農場くらの意味であろう。農場とは、茶葉の生産だけではなく、その精製・保存、製品としての出荷までをトータルに扱う。

○關左 關東。南面すれば、東は左。

○頡頏 拮抗。勢力が張り合っていて、差が無いさま。

○一 ひとつの。どこにもあるような。



- 荒僻 荒れ果てた田舎。
- 逐歳 歳ごとに。毎年毎年。
- 増殖 数が多いさま。人口や富が増え、村が豊かに大きくなることか。
- 海關禁 海關は、海岸の関所。海關の禁は、いわゆる「海禁政策」。かつては「鎖国」と称していたが、対外私貿易を禁止し、お上が貿易を管理するもの。日本だけではなく、朝鮮や明でも取られていた。
- 互市 外国との交易。
- 出口 輸出。江戸時代、日本が外国との交易を行っていた場所、「松前、対馬、長崎、琉球」を総称して「四つの口」と言う。
- 輸將 將は送。輸將で、運送。
- 千有萬斤 有は、又。さらに。千斤、さらには万斤。
- 美 優れる、素晴らしい。
- 著稱 名をなす、有名になる。
- 歐亞 ヨーロッパとアジア。西洋と東洋で、世界全体。
- 爭雄 勝ちを争う。
- 洋賈 西洋商人。
- 旅于東者 この「東」は、日本の東であれば、「西は宇治、東は狭山」となるが、あるいは「東洋」の意味で使っているのかもしれない。
- 記號 記憶や識別の便のためにつけた印を言う。ここでは「狭山」の商標だろう、「文集」では、「名號」としており、こちらであれば、名前・称号。
- 彌望 彌は、広く行き渡る。眺望が行き渡るで、みわたすかぎり。
- 黄茆白葦 茆は、茅に通じる。「文集」は「黄茅」に作る。「黄茅白葦」は、黄色い茅や白い葦が生い茂っているところ、で、均質で単調な光景を象徴する表現。「彌望皆黄茅白葦」の句は、蘇軾が王安石の政策が人々を同一化させるものだとして批判した文に登場する。
- 豺狼 山犬とオオカミ。
- 窟宅 ほらあなに棲む。
- 沃壤 肥えた土地。
- 題簽 商標ラベル。
- 舊碑 重關狭山茶場碑。
- 天保三年 西暦一八三二年。
- 倡導 真つ先に言い出す。
- 熾盛 燃えさかるように盛んなさま。
- 尠 わずか、少ない。
- 前事之不忘、後事之師也 前漢賈誼「過秦論」(「史記」秦始皇本紀引)に「野諺曰『前事之不忘、後事之師也』。是以君子爲國、觀之上古、驗之當世(俗諺に言う「以前の事を忘れないことが、後のもののお手本となる」とある。だから君子が国を治めるにあたっては上古の事柄をよく調べ、それを当世にあてはめてみる)」とある。
- 恢弘 広げて大きくする。
- 前緒 先人の残した事業。
- 勗 勗に同じ。つとめる。

- 職業 生活のための日常の仕事。
- 務 役目。
- 其 人民が職業に勤めること。
- 既 ○〇し終える。
- 嘉 賛美する、高く評価する。
- 昌盛 盛んになる。隆盛する。
- 其 狭山人民を指す。
- 堅忍 意思が固く粘り強いさま。
- 耐久 長く持続する、長い間たえる
- 屈撓 しりごみする、ひるむ。
- 光前 光は輝かす。前は前代、祖先。祖先の光栄をさらに増す。「光前裕後」は、祖先の光栄を増して、子孫に恩沢を及ぼす。
- 崇 高くする。
- 殖 増やす。
- 詞 「詞」は、口語的な韻文の一種のことだが、ここでは「銘」と同じような、文語的な韻文。碑文では、散文で事柄を客観的に述べる碑記だけではなく、「墓碑銘」やこの碑の「詞」のように叙情的にうたう韻文を書き添えることがよく行われる。ただし「銘」や「詞」は、必須ではない。
- 菟道 宇治。「うじ」の語源は、兔が群れて通った「うさぎみち」とする説がある。
- 建陽 福建省北部の県。北部は武夷山麓の茶園地域に相当し、中国随一の銘茶の産地とされる。
- 橐囊 どちらも袋。懐、財布。

●口語訳（章立てと小見出しは訳者が便宜的につけた）

【題】

再び狭山茶場の碑を建てるの記

【撰者】

江戸の、中村正直が撰述する。

【銘茶、狭山茶】

関東において茶で有名なものは、狭山である。宇治と東西で拮抗している。

あるものは、「お茶の香りとしては、宇治よりも優れている」と言う。

【狭山の地と茶場開闢】

狭山の地は、武蔵国の入間郡にある。

もともとは、どこにでもある荒れ果てた田舎の地にすぎなかった。

それが茶を植えるようになってから、年を追って人も増え、村が栄え、その名が大いに明らかになったことは、林復斎の手になる「重開茶場碑」を見れば明らかである。

【海外交易における茶の重要性と狭山茶】

思うに、安政の開国により、海禁政策は解かれて、外国との交易が盛んに行われるようになった。その中で、我が国からの輸出品のトップは茶葉であった。

毎年、海外に輸出する量は、千斤から万斤におよぶ大量のものとなった。

宇治茶などは、昔は日本国内でその美名をほしいままにしていたのだが、今や世界中で

有名なお茶となっている。

その中で狭山茶は、後発ではあったが勝ちを争うまでになり、東洋へやってきた西洋の商人などは「狭山」の商標がないものには目を向けることさえしなくなるほどに至った。まことに盛んなものと言えよう。

【関東のお茶を代表する「狭山」の名】

そもそも、利益を生むところへ集まるというのは、人間の習性である。

昔、関東は土地はただっ広いが、住む人間はまれ、みわたすかぎり黄色い茅や白い葦が生い茂るばかりで、山犬やオオカミ、狐やウサギが棲む原野であった。

それがことごとく開墾されて沃野となる（と、人がたくさんすむようになり、様々な産業が生まれた）。

そしてこの地から算出する茶は、みな「狭山」の商標をつけるようになった。

「狭山」の名前は、ここから広まり一般化した。

【海外貿易時代の茶産業】

古い「重開茶場碑」を遡ってみると、それは天保三年に建てられたものである。

その当時は、まだ海禁政策の時代で、海外との交易は行われていなかった。

しかし、当時の狭山の人々は、勤勉に率先して勤め励み、盛んな製茶事業を作り上げた。

それは、あたかも、子孫達が、過酷な競争である輸出入に従事することを予見して、あらかじめ事業の基礎を作ってくれたかのようなのである。その功績たるや、まことに偉大なものであると言えよう。

こういう諺がある「前にあったことを忘れないことが、後のもののお手本となる」と。

そもそも、狭山茶場が盛んであるのは、まことに父祖たちの勤勉努力のたまものであることが分かっている。そうであれば、後のものたちの幸福利益は、子孫達が父祖達の勤勉努力を継続して怠らず、先人の事業をさらに、益々隆盛にしてゆくことにかかっているということ、理解すべきである。

努力しないでおれようか。

【一家の利益から全国の福利へ】

加えてわたしは、次のようなことを聞いている。

「人々がそれぞれの生業に勤め励むのは、自分の家を富ませようとするからである。しかし、生業に励むことが、国全体に利益をもたらすものであれば、それは一家を富ますよりもより大きなことである」と。

わたしは、すでに、かつての狭山の人々が勤勉に働き、それが現在の隆盛をもたらしたことを褒め称えたところである。

そこで、更に次のように望む、現在の狭山の人々が、目先の小さな利害にひるむことなく、硬い意思を持ち続けて長い努力に耐え、その結果、先人の光栄を更に輝かしてそれを後世に伝え広めることができ、さらには我が国全体の幸福と利益とを益々高め増やして行かれんことを。

【建碑の企てと碑文撰文の依頼】

熊谷県の某が、私を訪ねてきて、郷人の意思を代表して、私に碑文を撰するように依頼してきた。その文を石碑に刻み、天保の石碑に並び配置したい、とのことだった。

わたしはこの企てを大変よいことだと思ひ、喜んだ。そこでその依頼を承諾して碑記を撰した。さらに韻文の「詞」を作り、文に書き添える。

【詞】

その「詞」

お茶は（日本の）東で産出する、その味は甘く、また香は芳しい。

狭山の郷で、茶場が開かれたのだ。

土地の性質はとてよく、日本最高とされる宇治に比肩するものである。

銘茶としての名声は大いに輝き、中国随一とされる武夷山を圧倒するに至る。

欧米の商人達は競い争って賞味し、一日で一万箱を買い入れるほどである。

狭山茶は、欧米人の胃腸を潤すが、同時にわが日本に富をもたらしている。

昔の狭山の人々の良い働きが、我が国の幸いをもたらした。

あとを継ぐ今の狭山の人々がこの事業を更に盛んにすれば、

幸福と利益は限りないものとなるだろう。

【記事】

明治九年丙子の歳五月、

秋巖萩原翬が書し、あわせて題額も書した。

廣瀬群鶴が鐫刻した。

三、主な参考資料

① 本文翻刻

・ 入間市『入間市史』中世史料・金石文編（一九八三）

② 訓読ならびに解説

・ 大護八郎、埼玉県茶業協会著『狭山茶業史』（埼玉県茶業協会、一九七三）。

③ 同文

・ 『敬字文集』巻十二（吉川弘文館、一九〇三）

④ 関連碑文

・ 宮寺「重關茶場碑」（「入間〇二」）

・ 金子「狭山茶場碑」（「入間〇四」）

・ 金子「北狭山茶場碑」（「入間〇五」）

・ 瑞穂「狭山茶場之碑」（「東京〇一」）

以上

二〇二四年七月 薄井俊二訳す